
サメテモサメズ

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サメテモサメズ

【Nコード】

N7173I

【作者名】

月

【あらすじ】

夢とユメ、それらに囚われた少年の小さな物語

本来持たないはずの意識を持って、自己の世界で目を覚ます。

「……………」

今まで体験したことのない感覚に思考を掻き回される。

とりあえず現状を把握しようと、周りを見渡すが、

「……俺の部屋？」

そこは紛れもなく俺の部屋だった。カーテンの隙間から朝の光が入り込み俺をやわらかく照らしている。

なんとも言えない違和感。いつもと違う感覚になのに、いつもの風景に閉じ込められている。だが、今が朝で場所が俺の部屋ならば、やることは決まっていた。

いそいそと学生服に着替えていると階下から声が聞こえてきた。

「早く起きなさい！遅刻するわよ！」

—女性の、声。

聞いたことのないはずの声なのに、俺はその声の主を知っている。
いや、イメージに合っていると言うべきか。

俺は「ああ、そういうところなのか」と、妙に納得すると、心持ち急いで階下へと向かった。

リビングのドアを開けると二人の女性が目に入った。

一人は、小学校低学年ぐらいの女の子。

もう一人は、二十代後半ぐらいの綺麗な女性。

「めずらしいわね、寝坊するなんて」

もう一人のほうの女性に声を掛けられる。

「……ああ、ちょっと夜更かししちゃって」

できるだけ自然に、ありきたりな言葉で返事をした。

ふと見ると、女の子がニヤニヤ笑いながらこちらを見ている。

「おにいちちゃん、ねぼうー」

「うるせー。おまえだってまだ朝飯食ってんじゃねえか」

「いいんだもーん。まだ時間あるもーん」

そういえば、今の俺は高校生で、こいつは小学生なのだった。

「ほら、無駄話してないで二人とも早くご飯食べちゃいなさい」

「ああ、うん」

とつさに声を掛けられたためうまく対応できなかったが、
気を取り直して朝飯を食べ始める。

「あははっ、おこられてるー」

「おまえもだっつーの」

しょうもない言い争いをしてしていると、見慣れた人がリビングへと入ってきた。

「おはよう」

「ああ、おはよう、親父」

実に無駄のない事務的な挨拶。だが、そのいつも通りの挨拶がわずかに強張った俺の心をほぐしてくれた。

「おはよー、おとーさん」

「おはようございます、あなた」

他の家族の挨拶にもそっけなく返し、親父は新聞を手にはり着いた。

ふと、リビングを見渡してみる。

テレビから流れる朝のニュース

食卓に並ぶ朝食

並んだ二つの弁当箱

禿頭の親父

無邪気な顔をした、妹

台所で作業をする、母

みんながいる

―その家族の光景はどこか歪で

他の人からしたらなんてことのないものでも

俺にとっては、どうしようもないほどに、特別で―

気付けば、俺はもうこの雰囲気になんて耐えられなくなっていた。

さっさと朝食を済ませて鞆を掴む。そのままリビングをでようとすると、

「いつてらっしゃい」

もはや誰の声かも判別できなかったが

「ああ、いつてきます」

俺は夢に別れを告げた。

普段通りの意識を持って、俺は自分の部屋で目を覚ました。

……わかっていても気分は重い。時計を見てみると、すでに時間ぎりぎりだった。中途半端にリアルで嫌になる。このまま二度寝してやろうかとも思ったが、我が家のお堅い家長がそれを許すはずもないので、のそのそと着替え始めた。

「おはよう、親父」

「ああ、おはよう」

相変わらずな挨拶を済まして、黙々と朝食を食べる男二人。

馴染みの道を歩いて行くような作業のおかげで、ようやく調子を取り戻してきていたのだが、

「すまないな、一人で辛い思いをさせてしまつて」

余りにも唐突な言葉に目を見開いてしまう。どうやら俺は知らない道に迷い込んだらしい。

「……いや、私はお前に何もしてやれていないのだと、改めて思つてな」

「……………」

「たった一人の家族である私がお前を支えてやらなくてはいけないのにな……」

「……何言っただよ親父。おれは大丈夫だよ。ていうか、今の親父のほうが心配だ」

「そうか……。いや、うん。そうだな」

それで会話は終わった。親父がなぜこんな事をいきなり言い出したのかはわからなかったが、もしかしたら、親父もまだユメを見ているのかもしれない。俺が今朝見たような夢を見たのかもしれない。誰かと同じ想いを共有していると思うと心が軽くなる。それが自分の慕っている尚更だ。たとえ救いを与えることができなくとも、慰め合う事はできるのだ。

鞆を手に取りながら考える。吹っ切れたと思っていた家族の事、同じユメに囚われているかもしれない親父の事。

果たして、そのユメを想うことは罪なのか。全てを断ち切って、前だけを見ていくべきなのか。

いや、そんなことを考えてもしかたがないのだろう。叶わないユメを見る者にできることはなにもない。ただその幻想が醒めることを待つばかりだ。

さあ、今日もまた変わらない、いつも通りの一日を始めよう。

（後書き）

この作品は私の処女作となりますが、ほとんどなんとなく書いてしまったので

メッセージ性などは皆無です。

なにがやりたかったんだって？わかりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7173i/>

サメテモサメズ

2010年10月10日11時01分発行